文淵閣
四庫全書

次磨　細　巻之名以哥詞号之源氏の篇の三月より次の年の三月までのすべての事物語よそくそひ内よ源の除名ある事のまゝあるへし柳の糸乃未の弘徽殿の遊ざさうら遠流あるへき定めなるもありもやうやうの事をかきつゞけたるひとつの物語のさま也　除名とい成さゝれる官位を降し貶之　河光源氏諭吾　詐偽　弘徽殿　詐てい仁義八専愛のなりくひすてこうくをこうの事也　孟入乃右府　称名院云も詩三百篇八思無邪の三字をこゝろ。風雅八善邪心肝要也源氏物語をい感着必衰乃ものてんとう沙理をもり入い旨事にもる也再冏の付うへのごく善ものよ也

うさこと也　孟苑蔡里の巻よりさの世よそくけてとゝろ〳〵冏よつけそいひさる初へ弘徽殿乃強紛うてた迂あるへきさゝとつゝくゝ罪源氏ゐ遠流あるへきさなど定めりゝるこや。遠国なるよゝろ沿んをはゞてこゞろ〳〵沿ん上的之ゝぞ〳〵ゝ細ゞ〳〵繁昌してるねべくやとそゞもこ孟原の通塞あるべきことそひまくくもそゝりまさるまとい遠流よ處せられていまの思惟ゝり。重罪ハ本流。徒罪ハ近流。妙原のごゞう〳〵罪のさきおよめばそひまくされともまさの卒のおよあみてそよまもさる罪ともやあさんとをまこそいづくへ

世中いとなまめかしきものにして人のすまれびをめでゝもこれそもりのまことにあまの家ざる様よなどこそ〳〵ゝ人ゐ見ぐしけさんをもおもしろいてゞ思いなるべき紙人ゐろくこそ笑ひ桐壺のかゝりの栄花今そこゝかき世のめ未ふつゝ〳〵ゝ末ひつゞけまいよ。ゝ紙ゝ〳〵ゝ物と物りひとそこそつる也も。いまゝとゝもそこゝ

右天禄四年三月十九日
落髪（おろし）入道（にふだう）前（さきの）関白（くわんぱく）太政大臣（だいじやうだいじん）藤原道隆（ふぢはらのみちたか）
法名（ほふみやう）を七（しち）日（にち）の程（ほど）に受（う）けさせ給（たま）ひて
二年（にねん）三月（さんぐわつ）廿（にじふ）六日（ろくにち）左遷（させん）太宰帥（だざいのそち）に
いまさらにもおもひ給（たま）へまうけたりしかど
世（よ）の人（ひと）の口（くち）さがなくて
細（こま）かにも奥（おく）ゆかしき事（こと）
いふべきにもあらねば
右天禄四年三月十九日
落髪入道前関白太政大臣藤原道隆
法名を七日の程に受けさせ給ひて
二年三月廿六日左遷太宰帥に
いまさらにもおもひ給へまうけたりしかど
世の人の口さがなくて
細かにも奥ゆかしき事

そのおりのうちかずまさ（細川忠興）嗅例の装束
細川忠興 三ヶ所ノ人西宮
左府のおひ人々てをし
うぐひす近のおもひぐれ
と申ことく但物語出
物ごとに左府左近の事
と遠よ陽うらう不詳
南ノ乱師安和二ノ寛
弘のすめまて八四十年ハ
かりせ
ちにくれて 孟ひろハ悩り
おもかげよ称する物ぶ（源
氏物語ノ）師曉ニハ世よく
れもせず思給へくらく
思こころも也
あろ車 孟あんとよめり
（お）女の車ニ男も車ニ人は
馬ニ附のるニ依て孟と
人よ礼をいふもの也
河網代車ニ栄花物語ニ
おやーのおろ車ニて殿
よりうち給ぬ。師内大臣

九重の内のうち
ろくろくろくろく おやこう
人のふうさをぐらひ
やうく
ろくろくろくろく おろく
ろくろくよ夕方のろ
ろれまろくぬとあろくろ
まろ
ろれくろくろくろ也 細川忠興
の御源の除名ろ也て出仕
なろくろくろくろ（お）原の除名
ろくおりなろくろくろ
去年の冬ろり此三月乃
ろ物語の面よろろれ九
ろろ
ろろねとろくろ 此役仕ハ辞
官不辞任をし陪任をや
ひろハ罪科ありの河の
今任をろくもとろ
多おもハ衣のろり任
のろよあろれ 細川
ろうのろく 此腹を盛す
ハ官任の乱也今をろ
をのろろハ休退のろく

なろやひ
ハいろうれ
（細川忠興）
ひさーさ
ろぐよも
（お殺仕大臣）
地ぐろ
ろうれぐよこりせまろくろんほぐみよ
ろうねぬ首物語もまりろくろろ
とおろくろれど男のやまひろり
（細川忠興）
ろろんとろろまろくろくろ
（孟殺仕表ろう）
よろり地ろくろまろくろ
ねもろろ
（孟殺仕ハ表ろとハ表ろとハいろれてなろろう）
ようふまろぐ面ハ
ろくろくろぐろ今ハ世ろぐろ

花鳥諸居せる人のかぎりおのおのうたを腰折とのそれをもとりあつめ
てまきりて序などのかきつらねたるを見るに私よりはじめありとあらゆる
ほうこの海内の貴あやまれるもいやしきも男も女も細河海は退休といへり花をも
老若河海の別もなく歌を詠じ明花鳥依をも
今はしものわらはべまでも歌を詠じて生涯をすごすものなれば
かぞへもつくすことを細歌道をよく心得たるものも作らねどいうにもやまざるを
歌の功徳のうへのやうの
事もあるべきにや思ひがけず
しのうなり暁かの
さしもなれじうり明日
花もうかの細河よめ花
ことをさうほまよるもと
もうかるへきあひじと
云どもさく又日本紀よ非
功皇后三韓を征たまふ時
新羅王のちひの祝よ
来の日吾よあもち公お
きるれにのこのがりく
早くまゐりぬるものぞ
さねを退樹せでといふ
ふるすわりもこうあり
ぞこまのうへに阿礼

和気川に新羅の国より
船出ぜし日月に及びぬる
ころのことなり
孟夫不尓人不尓
てく官爵を
細除名のまゝ花るよみ
より花衣爵をとらんと
と除名をとゞめたまへ
より出ることなり有る女
位をこゝく除くに
位の人よりるをも去源
氏も除あせしるくよ
りて五文のるとしを
さ給とみくより配流
の人を赦免除名もる
るく除名ぐりめて
流罪せしむるをあ
てそれ八罪の軽きみよ
るく源氏の除名の先
辻の例を用ふるに
さ而こそるつゝに
妙新法とるく罪のて
てこるみこるるく公編
のまゝを八罪の此人を

ぢ、そぐうくのとこうるん作ろ。
さてうくる爵をとられぞおこもろ
なりのまゝもとよくくる友爵をとられぞおこもろ
遠くこまもうつゝ
中よあうるべきよこそ作られ
国みもしくよくくるうつゝ
そべきさぐめるどもなうつゝ
こしなりつゝをよあうるべきよこそ作られ
ほの罪るさんよもせてくる
よごうるさんよもせてくる
てこそんりくよのぞまぬさをよ世とのの
さねうるとのうるんと坩

ことをもとくも書み給
みくら殿紛らはしつゝも
くもごひまつり候代り
いまもりつゝ
そゞろよ　細いんとものそれ
ないねもとくもみゝ
暁古あれゝもあり
奥入へよゝもとくも
給仰の歌ことやうれと
とゝ人もるゝ具平
ゐでそよゝれいむよ
さいうれてんひとりまる
ぐくろのそれ
明あれば東方
細三月末の多ゝ
う　お原の京をそれ
まいたうと九六日とろ
べしそいれ三うの
ろゝべしも明云左近
月九日見しおよあり

れ前よさうく
給人まりいげ
細菱のとの女房　盃原の
給云のもいへ
お原のく
人もれど衣と
るよ。とりとも
のもれまりまつく
とまるなるへ明あれば衣
ろそこいとく
のあれよもあ
まのうらんよ

め給中納云のもをなりをくんとめや。　細原の河
つまとものあけくめう。まこもいめん
あうんことをもとも。　お中納云ものうへ陽ろよなど
もろ世をろゞけうぎ　細たゝ
しをとゝ原の浅梅ゝ
一月ばよさ　お中納云ものうへ
のもへいりのも　細たゝ
のと、宰相のさいしやう
うそこ男しまりこ
まりうれくぐらさ
めくひ給うれこぐらさ
なるもざ海ろもろのう
るれふぐ人のいぎとなき給ふ

衣ろくあもせ　細世を五
ひ給ふせ　お
まゝゆゝ男あすき
りなり
う海ろりう　細菱上
のを世よいろりうくゝ
五菱上まゝさいろゝに
くいゆりまあぎさを
ムろくさ　細夕方のう
せ夕方にいとゞひをー
ろくゝとく五夕方のれ
さまりんまぞいれ遥海を

へさるよとなり
とりべ山　細　薬師なる所也
葵上をもてひさうさま
也只今次之のうしに也ひ
ろうしせ

暁のわかれハ　細　宰相紫
よ宰相也江文通別賦ニ
云黯然銷魂者唯別而
已矣

うしむきそかれ
細　おもかげのあまりも
わくうもと思されねども
つらにもまにのころのし

あげしりやそしつせ給ぞてとまるくもし夫人
まゐらせ給ひてみまして　盛原之
原　花鳥迩山の煙ハかへひの上のこと
とりべ山もえし煙もまぢかやとあはれの
不
煙やくらしみつぞゆくはくしけるを　おゆ大文への返事にも出る
のまゝに
うらずまて暁の別れうのそやハ心げ
かつき
くしなるおもひあらずある人もあんし
細　宰相の詞之　暁月
とのまへハいつまつ別とりよりしまう
うそ侍るなる中みとげさいはめぐひあ
あまじうおもひあつる程うれともみず思
そそげよあさくうし出り人つまぞおし給
細　大文への返事
まゐらせとも参まふすまへあぐる。
さでもそけれ侍る程ぞうろうせさ

いまるうきうんハ　お　夕貌
とみてハうさせの初し
もるちりぬべくれバ出く
大きんなしく
とうかわくもうぞるよ
河鬼狼　荘子仁なき物
虎狼まるうてる物あこ
れずよも哀きりみべきこと
仏涅槃の時ハ虎狼も尾
をふひ人をとわづりて悲しむ
よく花一本まハ鬼をただ
とうきめぐしとおもふ
ハ好ずしきさ之
まていつけなく　細　源を
元服の始よりえんをし
人並之　明　付巻ハもうて
とうふ詞をとりそなり
まくや　孟　此詞おとん
しそうる程まくのまく
みゑればおもとうけげてさき
しづま子地も
かき人の　細　とりべ山の
越なる世かれの中とお話で
扨あるき人の煙ハ濡なる

まへげうこうなきさ人ハきて海へんまつけて
もはしうる世のかれげうときひまてうれ
めぐるれバ心づくともみさまへおしていそ
ぎまうぞ侍くこうて絡出まみ程ぞ人で
のぞきてそてまうず入ることの月いとあ
うさよいでか海めしうるそつそ。
物をゆがひうさ海とらゆ初なぎに
ゆえ
とろうさめぐしまして、いもけなく
をし程ぞつこてそまうそめてし人で
細　夕顔そへ人かきこ之
うれべうつしへうきはありき海とりすで
世　まくもやのゆくへし
とおつまぞしやれりくし
大炊
なくき人のきれやげてぞへてうん煙と

の流しかの句也
ひすやこゝろそやハ
細流三編世師 是より新
てのゝやしわんせるてハ
よるごひをもせんとも
ぞくのこゝろをのせて
かぞ世と見るまゝわるよ
細流上の句かりきいの
おもひで也るかさ御也や
あかしなしつるもあか
とうけくの句く分う
のうの如来如るより
かるまして思ハずなら
るハ何事か心との縁之
こゝろそう
あ業の深切よ新くを
流のこゝろと思ひて
世乃中のしを
細流上の子共ハ人目を
そうかりの新り流
新もかくさと法実ハ職
しくゆひ給也

ながれかうき海あやおぼしすつりくて
竹俣どごみれめかれどしおりふかくく世と
もろもろはよへぞろかたしてことのど
のづし花ちもる紙ひもやごりりそ
やうつねるさ世よ人ふもなきにけりさ物た
心とれもそんよいとたしうてあんと受
えまんぞうりよ世とえうまりかよお志波
なりとはおるごとふりとづりのまく
いとごと始りのさうさ海人もりうしとなると
しくらぞうしちらんとはいてとろるそ
りしもりゆかりつきるよをよおして世の事
えとまづくちかりてやとづれさそ給

子及しきくよ 母また
くれ祖母 のもろれ今又源
よ別あふて紫子先ぐ
さんくよるくまれ
あふとし
さらふきりありてより
きし給
血縁母の乃ろくしき
きりふとん乃紫人造
奉るなり

桐壺よゆかられくるて
細流の句く是今紫上
とするる桐具し給つず給
らしと相う給歟り
こ今ハひとつて
は家ハ源氏の事さき
ら紫の縁りハいぐ
るれがとく

もずおとつひよぶにまうり給をぬぎ人
のもろんことをもりりしく中くもら
れそてまつうそでやこゝるすましをまて母のゆ
ぬりさむぞの世よにそろすりしきいのあ
はうしさあるゆかしやとふんぞかぐよ
つけてまられ給人うれとのまひろ紙がうさ
まりあろてりりそ給ふもいとごうのう
け道いられうらも給くとゝつれさて給
もぐ涙又よのりしきへりうすくげしそておれ
わりれありさ海なりし桐壺世よゆかられがる
うて年月をへ心ハ岩須の中ふもゆかへさ
てまつるんそ今ハひとしぞてのいとつき

おけるみこと（孟 ことわり）よれりの給（たまふ）の給乃給よ（細 海の句）明ごと
うぬよそうり。そ（孟 句）のほどもみいえうりやとそこと
のうめんもみいえうりやとそこと
なうそをごつつ糸ごとをやそう。
あ（細 眼をてうたにあ）うれのうれのまよなりめべき
ありうれそくんのともせてこそ
多もみてうこのこぐものて。
物語まいの月乃入（細 こころいる）る祢ごそくられて
私なり。女（細 こころいる）のこそれぞそうりてげよ
めうぐほなり（細 月をほよ）
月げのやどれう神いせそくとともとみそて

てうこさ海ぴうて
てうこう。只今の別の名残
修さんをつみもせぞ後
ぎ。わが君のうぬ分にもぴ
原のかえいとうくうくき
てもみてきゆこ。このつくの
女のそこ後よりうれう（暁 日）
つぐと（細 年の分に公別）
とうのしぶをまこる
れい惣めう
ぶうぐう（細 女をとなく
ううこう。やぐてうう
ろうべさのうち對月明
莫思往事（師 原氏のる
しうぶうきみくは
ぴめく雲のかげさ
れれいかくうめう
ぐぐうぬ泪のこ
（細 ぶうさをうぬ泪の
うぐうさい只めのまよ
るかりうりぶ後をしぐ
月げぐしぶうぐうぬ後
きとうぬ後うぬ只今ぶう
さうぐうそうぬうぐ

もこぞやめ
がうろうぐ
（孟 原左ろ）
りめぐう
しうぐうん中
やぐぐうぬ
るれなどのう
（細 かぬ分への分）
ろぐのこぐよ
へをうろうぐ
うぴうろうぐ
の雲れをみうの山
の分をうぬ後
ぶ後とうぬ泪
さうぐうぐうぐ

こころにかなはぬや
文集 細 白楽天が文集也
花 白楽天の詩賦をあつめられたる七十二巻あり。長慶集ともいふ。長慶は年号也。昔は唐人の詩集は此文集をのみもてあそびしなり。されば後代にも殊にもてはやす
琴ひく事
白氏文集草堂記に漆琴一張と有るを河海
巻々
細 巻といふ字諺の物也 師 江領のまつりごとの外なき也。 桐帝などよりこの巻とて秘しまゐらする所の巻なるべし
少納言 孟 家の乳母が納言を所望しけるとて書たるなり
中務中将 細 兼源の御子 伊周の兄 六条御息所 紀の人々とも云 此人の中務中将は源の氏の人かと云
又は中務卿にてありけるにや

まことにひとりすくしておはしさぶらはんべ（徒然にて）
きかども文集などいれられたるこそ（孟 省略之）（書物之）
琴ひかれさうらひてまくりてきこえでう
ども花やかなるけはひもなくさびしきぐ給
きびおやしの山がけのさまをすてつゝ給さ
ぬ人でもならひそめけるかのこゝちと（孟 領し給）
みのゝいりしてよこしまなれるや（細 此上之）
うじ給ふみやのまさしくつかはしめて（御庄預物之 細 此所之）
さるべきすぢの券などもそれそれまかり（孟 此家人を給ひ 御領の下文など也）
ときたまへれらのとをしてまち代もあ
どのおどろかしまゐらせて納めさせなく
しきゐもとにききまいれば、たてゝき家

（奥へ入ての人々）しどもつゝしてありつゝめでたき御ものゝ給
（孟 乳母之が家人の作り給ふなど）ひおはしつけりけさの中務中将などやう
のひとびとうれたさせてかしこまりて
まゐる給はそれすくなからずもつれおはしますなど（京よりもてかよひ侍ハ例の事也）
けてこそへどいひのちおりてこの世よ（細 源の詞之）
みなるところをあはれなるとおもひけん（細 こゝらもなく家の内也）
人々こなたさまへとのあひてかし
をかれたるのかゝるとふとさおもひなど（此式人にとりてまうでき侍るべし）
きれくさせたまふけしきの御めれさ（細 宰相などの 此風流めきてうるはし）
ならるはる黒などかもかしこき海の（仰 かへるとも）
いかなるのみやあらめたまへらすかねかへり（内外源の氏のつみなどの事之）
しるしぬさるしし内侍のこそわれける（孟 それより勝月者の事也 此勝へ源の事也）

あやせるさ　細　妻ろろ
うのやうよ　俗文の句
ありぬる妻のまに　柏木
物のふをかるくさ　風
との時もろうの　雨也
ていかうかあれぬ　月も
思ふ人のかなれぬ
もみあそぐろひのふ也
さればかのせなれとい
こころも也　男をて
也　古今　催馬楽　郷
法の中宮一の宮
それとなん　孟
のつれふまりませい　源の
ふかよろぶと　よろは
妻夜ふやうひ　河水尾　五段
まつる月かな　源氏
こゝろのこゝろ
れぐこゝ　伯母
あせの罪　そぞあるこん　伯母
バのれぐこゝ　伯母
源月よ　孟ざし　根
なつれ　後のせ　いはるこん
水泡のごとくやそひよはめべし

辻の罪　いうとひぐこ　一年
それよろのうぢも　君
源川　細
作　なれ　孟　源月
水泡のごとくやそひよはめべし

あそこそのれり
細　くそれとみるこの
年山へ
さる山へ　細　何
みぐぞお山ハ岩陰れ
雄山れう　源の奥也　天暦
陵　暁　東花物語
法こゝ所潮のこ
こゝろのくと思
て書れる　明れの勤
国物語　九寛治八六九

二一条院崩御葬送七月八日也、八日のゆふべ男院
おはしまして 花 左衛門督 春 八条宰相中将
けて月ゐるころ 細 左衛門督 春 八条宰相中将
やどのかどうち 細 左衛門督 春 八条宰相中将
まうで 孟 冷泉院也

なかうつうめのそこなき 孟 表つかの松と深のそこひをふくと

かぎりとて人あつまる 細 春 八条宰相中将
冷のまれるひしまき

ぬしとうとや 孟 山陵の山
主隠れをあへしまきの
かりの
ふるさとゆゑと 孟 表つかの
ふるさと海と
うつりかはりゆく 細 春 八条宰相中将
細 春 八条宰相中将
ふるさとのかぎりなき
ふるさとのかぎりなき
ふるさとのかぎりなき

ひとりよがりこやてもえぞつ
ぼけぬせ
孟原生の侯爵の家 細雪
別しよう
ぞよせのうさはされる月まちいでてそ
まふれよ
をむろまち
ありそよ
中よみのそれ
孟秋院の侯爵の家 細雪
てうも
孟叔爵
ぐそうよ
ぶけづれ
孟陰籍 細雪
孟原生の侯爵の家 細雪

籍とふ籍ハきさき殿上人四位六位六位と最敬もろ〳〵のものを日綺の御とてみ物よ出ろう孟叔爵もくまろ原除名よ依て結ろうごとけづれさう
うとろひかれて 六位のぐうのみ後のろ 孟ハ
て下馬して原のぞるのロまよれつきてうこうへ
ろうろれて 細雪もうめ
しうとう 何時もくつし
とふその世を野へべとろう
世まあひあろう雪もう
さとうや孟そのこと
そて雪をとうせうり
けよいくせりうん
孟うりの陰方そ人り
脱てありしをこひうそ
うき世をハのまそ 細雪
雪を雪をとうれどもこ
どもろんろんを羽よ巴
うこん雪の出名にせり

それぞれ
のそや
ぞひ出
やう
孟を将監方
ぞうさつれ
つうこのこと
ぞりみん人
のをとぞ
馬よりり
孟原方
うき世を
細雪 何時ぞ見 日本紀
孟原生の侯爵の家 細雪
孟ハ
名をべ

抱めでもろうらうさ人
孟右近ゟ左きこんよ源の
御寺と感もさく
おりましれあり候
孟法後よ御所の時を眼
おのやうよ思まふて
きゝりかきまでも
十善の帝王とても乃
心なり
よろ川のこととうくや
まそ
御源の御ころのおそれのるゟ
なり師そもり帝王も
崩後へ口おしき殺を云え
そこところとおつるよ
法基より何の御着
もみられでし
御くらはみちの草
細 古墳何世人不識姓
與名化作路傍土年々
春草生ズト 白楽天
かつれらんうるひて而
白しとそ

抱めですりらうきさんまそて我
よめでこともそもそもちれ山よまうで
そておりましれありさ候でめのまへ
のやうよ路がしこのぎりなきまでを
せよあすぬめうんぞいらんとさすくられ
しきはざなりけるよろ川のこととせなく
くちまでもそこうりとおくもちれえ
うけまりりあくみとさつり路月しの
さ候そそこさ候ぐのれゆいざんえいつらん 御源の口ことを
かさくさせよけんとらふひおしれえらは
道の草きげくなりて分つ路月といぞ
寄りきさよ月と雲がくれて東の木ぶら

なまきらけや
細 おすきれ月
の雲かくれさらとみて
古墳いろと名を御続
むろうとや月のつぶられぬ
ぶとんのおうつ思ともあ
路地ぐ露盤の露通のまあ
とおのみわるべし 晴日
孟桐盤のこととを月よ
添して見れがくれける史
表文よも御せうそこ
御源より泣へも御せうそこ
としく大内のうちられ源
のまかすおぬそぬく
五令殿とれかつりよ
細々露盤のれかつりよ先
八才の人すりとて表文て
そく源人也孟入石表の
御かりりよ表文へをへ合え
人まつり御しれ 御今ひと
まび表文へまいりしぬるの
御おりかかきとぞ
以う又表のころの
細表文をとく 御表文
常苑の表よ以ろのおひを

こふくいとうしくり出むりこもれさ 御わのこくせ
んちして此ぐこのよおりし御ゆかりけさ 洒淅くロサム二ず何とさうらん
やうよこしまるるそころさむさ猪すり
源 なまさけやいてそうるんしとそくつなぐ
むろ月をくもぐれめ方あけくら猪り
ろりまひて表文よも御せうそこさこ
路五合殿とれうらうそてきあそもせあ 御源より五合殿の又御うらし
へぞそのつがひよそそぶるん数ちろれ侍
みまいり御しんぬめうさんおもさのされ
へはまかりてかふさ候へのれ御ゟよう川 孟表文へ御やと張もらとえ
そうろうてけいしまん
源氏 いはりきこ表の路乃苑をうんとさとし

かきことよ　細 紫上の御心をなぐさめんのまゝう、又源の帰京をいのるつきことなり

細 平絹
もりのはるそし世今源無官なればく さられまさ衛かつりうう とハいへり明繒の字也 昇 平絹の直衣也直衣指貫の地のすゞし夏秋也 直衣并数からりて薦色あさき也冬ハ白き なり指貫も并よから あさきの浅深わろ之一勘

しのひしのひにめづらしてまゐるほどのみ
おひなどよつけても、いまはと世になく
なりさらん人のやうにのこかゝられ　細 北山僧都也
ば、川ハゆゝしうて少納言ハ僧都によはい　少納言也
のりれこしわざこそも、二ところよまずか　仰 僧都のいのりまゐる也
うれしきをゝせ給へ川ちとく想なすげく
れんどを川めすそうざゝめ、又りとのごく　紫のうへ　源のうへ
まうりまめくさき海よなどしぶらぬ
まゝよいのりちゝ給びのほとわねぬる　紫上より源へまいらせらるゝ也
どでうじてもりすゝふとりのはるそし　河 縁 直衣
さしぬきゝ海りうう心ちとろもい　此直衣指貫の事かりそめにつけても紫の北くゝ
うぞきよさゝぬ涜との給ふ両かげのげ　細 まへゝまいて源の子れ也

けよ身にそひまつるもげよとふ詞也とつてもせ此源のさりぬ猿の影ハえなれどとまえなひし時鏡よ影のとまる心ハあらとおひて別ても影ざよとまるぬなりぞと思ふしのひしさされども仰ハ源のよま給ひしこく恋しよ身よ立そひてむられぬさざまそぶく源のゆるせねだゝひのくしくよりぬまひしまきき花はかなきもこゝろてハよましふゝまき花そしもむ　細 まやゆかりとよべまへのめてなうしあひしはらくど花ひきるゝしまひし此琴ぬき捨ゑるはずとあいし詞よかけてこそく　細 死別 ひさもしゝせよおくまりも生別のことハ

よ身にそひまつるもうひす。出つうのひ　源氏の也
しるしありぬまでもかき捨ちぬ給へ　かう
みもむのゝふさがりてものをとゞう　細 紫上のまゝ世は始られたるまつぬれ〳〵ひとゝ
むひめぐりし世よちとわらひの　孟 源の父母の
人ぞよあらましてすれむつびゆくもら
はかなくわりかけひゆくりもてそ　せめて別むつひまゐと紫の心給ふ　孟 せちしまる也
なうりまれハ儀によきされて恋し　ろう
うちひゆくしまゐるとうりたらひさそ
らせぬすくぬるんをいとむつうるてい　死別ハ一向に甘ることろさうるよ忌る也
わひひきくさそもやそくそれもれどもお
ひやぞうんぞくほどいちうされどのまで　ろそわんとく
と浪わうは別なもあうぬをかけてる。

れ
ふくさうなり　細　此はの西の次なるべし
ふく祖い近くれど　細
始期るさうく
ゐまでとうさうわる　花別くいろあひさ
入夜のうやみも　孟そう
表つかのはるうく　お冷の体
枝えとほをひまふなよ
あつかのありるく。

うのくさるくるまの
養法人表つかのはるうく
くよりねそいねるれども
世を保まひとく

うりようくるまの
細保の番通のうと八世
ふいひありまなるさく
人ごと八人言也　孟これ祖
こほうとごみのえんと
ま人のはるれど表と保
ものはるどいてねなり。

保のうくるまのうれ
やくめがりの　細くり
のとうてくくるー
おやうよひのくり
めりりの人乃はりむ
けりつごそよくてあ
ふりうりしんのひく
よまりせぜくえく
紙八句俳ふう法思比
が保もひあうりがの
夜くれんのひくふま
うせどひねて人のい
ひ物るうてやまぬ
るく春物のふむけれ
しいる故ー　俳あ夜半
竟八ふるー秋ー秋の雲
近るさう

新よあーうも　細　茶ま池よ
くーりるくうやうかりれよ
商雲も保を新よがを
へるくく

強くるるるをやくそ
花俳やくを役のなようり

花別くいろあひさ
つきを涙るうる
とよりぬ。
義表つかのくほと表通のくく
里。はをくをば。それなつけて人のとめ出
くいねがくよ。ねくよがまのび
えなどのりり
くくうり
世のひとごと
出りくくひをとう　晴門
とりむけるく
くまりをば
りりそうと。
ざくんおう
細みの須之　孟前へ
のくろいて
　強
　俳
あまもなど
　豚
うりやは
くゆうなみりく
どもいえなん

あしこ御くなりさハちかまよまゐりきり　細　隠やうと様みの後よりせくらり　河　抄拾遺
秋までの命をちくむ君の世れ荻のあるえとやくしやくめ
論よくわまるよ　蟬ゞよ教多よ要須之　晴　ましての勝のちひのゆくゝも心さと
之由人源よ比もらし　抄　海人を源よ比しろうりも世ちのつねの海士よ乃うが心云
よハうく付つり　師　空らの後ハ蟬ゞゝふとよむ又一段御まろしおそしくひろけて
教多よ流くむすり。んな彼源のうよちゃくわゆゃいゞちらんとわうよ若て勝
の源とゑうゐりハ弘徽殿太后后ふ教多の人々よ包むゑろてあれぞんの中よのと
みり依てちひやしんろくもなきぞとのふく彼源のうき隠やくあまハむりひを
うてひふとらくちろるよ比云うて源よ比もんろすめなりとみろ
さうかりろりともいえるん　細　これまくの御へ　抄　源の譜居乃表みうるすハい
ふをこくわうしりれハ申うぞともいぶ蒙れ　勝の民の事を中納言の君ろすれ中よまさえるろよ
中納言の君れ中よあり
姫君の御ゆかとに　細　心と
こまうかくの物乞なれ也
とわうるて源より文
あろうしハみくらり事
ちけらさゆる此物後よの
せさる乞　晴　二条の君
への文乃内有するし
　抄　極らむ袖よ
うらんの
まも彼後へぶろ衣を
れぬれまそ之　晴　ろ
の私をとよわろ下の人よ
いろめ物みどくろしの

の君乃わたりよ乞ろ。ゆりおう(中納言の君の乞ずに勝の姫を乞ずる時)し海わたと
いろじくひさり。衰とちひをそく　源の乞　終ふ
みぐとあれバうちまげられすぬ　紫上よう　姫君
のはふとはんこしよこゝやかなりし　物う　(の乞く)
つかれハあかれなることも抑くそ
　紫式　備人の志月らむ袖よくゝべきよなまる

ゝへぶろうゝ(の)のころも残ふのゝいろし　細　ふくそ　紫衣とかかり
まろさ海みぞしいてころうしなりゝゝ何事
とらりしくもゝりのし給を云ふさ海よ
て今いゝとよこうろあはさしゝうゆるさ
くづゝふ寄もれくちめやうみてあろべき　孟　偏ゞ紫ハらりよ折々そわるん
抱ぞして好きよいてらくらあゝうよ　物ぞくし物梅し
ゑあら西邦よ物かして、んかくと思ひられ　まらげ　細　紫上をも思ひても乞ひろんめしと也ぞ
さまんハれしのひてやむゝ人ましと物きそ　紫ぞとおもふを乞ゝくし乞て　宗白と切
まさらゝ人しるずやうゝき世よつ
とぶるうしるえんと物ぞはやぞて御さ
うちんみておけられとこるもひて物られ　細　文多勇也孟　乞ハ亲ゝりれ御文の中にて様まつけてと
人とのへりの乞の御くしむかじとあり申しい

ふよせまわるべし　細　紫式
上独ゞのさまく又ハ姫と
との許抱ゝぞくしし給
ふよせもとんあるべし
何をもらくゞぞら
　細　紫上をも寸孤人と物ぞも
く孟らうくとうハ上﨟
しきく
今ハゝよこゝろあれさく
しらゆきうつふゝるも
なく　細　今ハ心とめうよ給
るふまかくしてまろべき物
ぞとく
やぞて御さうぎんなて
　孟　後生菩提のためれ精
をとく　細　聖廟も涉
精をつそてうしせ　河　聖盾
宰府よ下向の時ちち不
断の精をみくね夕法
華経を講說せしめ給
なりとこ叙意子言の
中よも微々抛ナ二三ヶ年ヲ愛楽一
漸々謝ス葷膻ヲ二ナどあり
又重陽の御佬よも菊酒ハ

為誰調長齊肯終不被

云く
あくこの心ハ　細　人の訳
のんハやこよおしねども
といふよいかわるやと
なり。父母のすまらハ
家土のをすんりしなき
とや。父母ハこの身さ
人くも侍る故く恩愛
の中よハ夫婦の中一段
大切なるのく
かるく　細　継使あるき
物深まり御息所へ人を
了　伊勢もうらむまく
御使あるく

とかくしられどかの門くしわひをく
かのりしさんべ掏しまへバうどうめくう
ハわしだしとおかしかさらバ中くこれた
いまだしられあらぬやあしん。海こうやさ
はうらみし額のまへされよりしてぞり。
この浮勢の家へもれつひありそうどのれ
よりをふうくへらぬまつまりあさう
ぬことをうきまでり云の梁筆づひる
どぶ人かりことよな海めりしらいうらり
ふうそしさり。あ侍さノつとは故ありひまへ
られぬ御もまぬをうけ結つうも明ぬ夜
のふましゃいとすんぶりとぞ年月をへ

つきかくさ　細　我身のことを是
我身秋まで々ハ仏経まよ
をふれぬしらるとつきふ
りしとハひふまとくと所何只
紙身のおよらひ志づき
うらんかなるべし盃秋家
よあれバ仏経よ捧きるを之
哭よハさ家くのとひなど
紳事に仏経よ捧ぐらり
也てぞしふ段あり不用之
うく此侍めや入尼右府佛
経をしよとくぬるとき
幾御息所の秋家よお経
るき請るハ高よ孫あ不祝
よ経を忌といふく深罪
よあらりて縁くもろ人
るれハ面白き也深いやう
て御家あるべきが。秋家
ハいつもあきさうるれバ
對面も絶ぐうかるるす
こともり　仰　細暁一塞花盃
義一寒之可酒不好
紳筋深や　細　薪るいひつめ
うら面白し。深ハ限りき

ずて給うじと思ひやり守くさみするかも。
つくるくさ身のことそぞなく思ひてさせんて
とももうらかなるべきれ
うらさめうりいを紙の力まで思ひや道を
しゆうりてふも海のとくしめくふらど御よ
まりへうさ人くぶうし世のありさ海よし忘紙
いつよなりもろべくまよしと切りり
伊勢語やちかひのうさよありてもやふ
ひやうそは我身めそうりのと義と云て
ならまし。らずくうさまつる。志らさ
うらのうて定め投びうりとまさづけて。
もをつきみじ云ある。義よありひとを

今上も待延させ給ふことなり。暁月の山嶺より
まさやかに波のくまなき
生ぢえありしことも
ようふぬしこそ
細 冷泉院と書在の山嶺みよさせ給て位を譲り給ひし御代
なりてみこそ 私勘漢語抄八男あり。
巻之後に譲文のみあり。〳〵式八文是よりは
ふづくしのおき風よ
河の文へ木のまもりうち
月の影くれゆくころ
秋はつるれど 細 まよ
海もそこ迄ふけ
海つらはやく入る秋よみをそ
こげなる山寺也とあり。
また海なをうちと更
関吹こゆと 河續古今集
第十三秋の末に海と
雨よ松ちる時雨を待ち
中納言行平へ〳〵びの詠を
すくゆよりせきあ
こゆちを海のうらづぜ
細 弄云花ちるよ雨そ
花ちよ雨よ秋風
の関吹こゆと 秋風
遠行そうみ波たのうら波

と御ふうちと 細 濁波とそよりて先年とありて往還ふうと
れ行く心何今業平八忠見ふりハ先輩也。細ぐは行平とありて忠見ふうの
物集ありとみえふ。式部のみを波行平の中納言の関吹こゆ
うらうとといふふく常よみづくしの秋風
ぐひろくみえふ行 細 花ちひくまよ
競人の紋浪くのうを雑集うふをみどり
まうくぐそそそくよりのあしを 花ちよ
まうくぐうち

細 拾遺の雨よまもれる
海ぐふハの花もうふぬ
べくふり 鳥位 花ちぬ
川ちまれでや雨の
花のうえとふうる
らん 細 玉川 盃川
ちうびて 細 幸徳中納言
の新古今 神よふきそ
お藤くの着もみじふ
うこうりちふうくせ
と波ちひりも叶行
ちりうなふ 師秋
忠俊てうねまうふ海
波ハ秋ちふ人もゆみ
くよひゆこうんよを
うふりふくる風よよ

とも地ぐく
よちり。琴 ゑ
みぐくのて
しまて
海波 いやふ
山嶺を則俗吹しまつこ
さうりぜやみくらん。とうひまつる。
さうりぜ ゆるよ志の
ふぐ地 細 あちふ
だれで。あひ

もろ波なれバ我なく声を
よそふるなりとなるべし
くめて見るべし 細 源の心之御文の
けはひ也
人々も我身一人の為に
ふるさとの住家をもすて給ふ
となり 哢 源氏の心よ
御文の人を憐むの文也今
は源氏の心をかなしむ也
となり

人々のかたり
細 若紫乃巻にいへる事は
絵 いつくしまくらせ
絵ハ人くとかし事也

やかにかみわたす。げにいかに思ふらん。我
身ひとつにより。おやはらからかた時
立はなれがたく。程につけつゝ思ふらん
家をわかれて。かくまどひあへると思すに
いみじくて。いとかく思ひしづむさまを。
心ぼそしと思ふらんと思せば。ひるはな
にくれとたはぶれごとうちのたまひまぎ（細 人々をなぐさめんの心をそへ給ふ）
らはし。つれ〴〵なるまゝに。いろ〳〵の紙を
つぎつゝ手習をしたまひ。めづらしきさ（是は絵の事也）
まなるからのあやなどに。さま〴〵の絵ども（細 此ゑ須磨にての事也）
をかきすさひ給へる。屏風のおもてど
もなど。いとめでたく見どころあり。人〻のかたり

千枝つねのり 河 在高名録 常則
名字天暦ノ御記中多在
之畧記之 細 千枝常則
皆絵師也
つくり絵 哢 源氏の墨がきせば
さ絵師に色どらせんや
といふ義不可然 只つくれ
る絵などともいふべし
ぞやとふなる心也 細 今
源のかきのふハみな墨絵
なれバ今別に彼絵師
どもに色をそへの絵をかせ
てみせばやとなり
河海 後ノ何 河 作り絵
彩色を施すなり
墨書のうへに彩色をする
を云 源氏のかゝれたる
墨絵をば彼絵師によらせ
つやと彩色ハ畫師の
口傳有之とぞ
私にいふつくりとは
上手ともの絵もいひなる
人なずそむへや
牡丹花
説なく

きこえし海山のありさまを。はるかにお
ぼしやりしを。御めちかくては。げにをよばぬ
いそのたゝずまひ。二なくかきあつめ給へり。この
ごろの上手にすめる千枝。常則などをめ
してつくり絵つかうまつらせばやと。心も
となかりあへり。なつかしうめでたき御さまに。
世の物思ひわすれて。ちかうなれつ
かうまつるをうれしき事にて。四五人ばかり（惟光良清など也）
ぞつとさぶらひける。前栽の花いろ〳〵さき
みだれ。おもしろき夕暮に。海見やらるゝ廊
に出給ひて。たゝずみ給ふさまの。ゆゝしう
きよらなる事。所がらは。ましてこの世

白きあやの　花云河海ニ
白き綾の御衣に紫苑色
の指貫とみさまもありぬべ
し又紫苑色も同じく衣
の色といへるもあまたあれ
かくれなきとハ衣にてをもや
うまゐてさらぬ也こまや
かなるとハ衣の色也直衣ハ
平絹の無紋にてもあれ
色ハ紫苑花田年齢ニ
依て用るべし花田ならバ
色のこきをこまやかなる
といふべし　細 花色ハ紫苑アヲ也
河紫苑之八表薄紫裏
蘇芳なり
しやかむにぶつでし　河釋
迦牟尼佛弟子某　臨命
頂礼白佛言夫菩提道
樹之月新隠沙羅之花
雲下略　本朝文粋願文
教大師の遺法を受継て
釈迦牟尼仏弟子と
八云　細　金剛仏子某など
いふごとし　晩同

のものとも見え給はず。しろきあやの
なよゝかなる。しをん色などたてまつりて。こま
やかなる御なほし。おびしどけなくうちみ
だれ給へる御さまにて。しやかむにぶ
つでしとなのりて。ゆるゝかによみ給へる。ま
た世にしらずきこゆ。おきより舟どもの
うたひのゝしりてこぎ行なども聞ゆ。
ほのかにたゞちいさき鳥のうかべると見
やらるゝも心ぼそげなるに。かりのつら
ねてなくこゑ。かぢの音にまがへるをうち
ながめ給ひて。涙のこぼるゝをかきはら
ひ給へる御手つき。くろき御ずゞにはえ給へる

細 濃紫の衣の色なり
細 あまりうつくしき御さまのふかきにあはれなり
孟 舟も鳥も小さく見ゆ　河 詩にも鳧舟と作れり
詩に雁陣といふ
細 濁
白き御手付に黒木の念珠のうつくしくあはれなるさま

ゆるゝかなる　河 緩之。のどかなるなるべし。師 花ハ経よみてあるなるべし
かりのつらねてなく声
かぢのおとに　花 雁櫓とて雁の声をかぢの音にまがへたり
かりハ　細 雁の声の悲しき
ハ心も哀しく旅人の歎
也。又云旅人ハあはれ
におもふ
かりのとぶをききて
ふるさとの人をおもふ
てわけてかなしきなり
声をも哀しく聞しとぞ
思ひ出し故郷の人に
歎きしみじみとてよぶを
空飛也　晩同
かきつらね　抄 かきあつめ
書つらぬ心なり
なぐさみかぬるとてつけ
る也　師 昔の友にあはで
まことにふりのつらぬとも共にふ
へきに雁ハ昔の友ならね
ども一旦かくのごとくおもふに
てのちにかきつらね
ふるきをおもひいでゝ
のちに思ふことなく
ふらう　晩 惟光云之旅雁
の熟をとくハ身の不安く
ふらくハりのさとの心也

細 雁陣易迷秋嶺上鳧舟難辨夕陽中　此心によく叶へり
源を人なすれに　個所の人を慰むとぞ

まへるは故郷の女恋しき人〴〵の心みなな
ぐさみにけり
源哥
初かりはこひしき人のつらなれやた
びの空とぶこゑのかなしきとのたまへば
よしきよ
かきつらね昔のことぞおもほゆるかりは
その世のともならねども
細 惟光也 紀伊守が民部の大輔となりけるなり
民部大輔
心からとこよをすてゝなくかりを雲のよ
そにも思ひけるかな
細 うらの淡路までそのてうくくに
さきの右近のぞう
とこよ出てたびのそらなるかりがねも

よりけてみちまでもなき紀氏 細 我今旅の身にて云也。旅居と斜月ハ我心から
わびしくまさにしも今ハ我身の上となりし也 師 我も思ひとちかふから
旅客となりぬれバかくよめり花とてもなし秋の空もなきものより
て常世とハ鴈ハ小国の世をすてゝ来る所によむなれバかくよめり也
とこよ出て 孟 鴈の旅の空に出ても友をよびて一つらなれバなぐさむもあり
ごとく源氏を頼みて有事也 師 つらハ鴈のつらなる友をいふ此のハ源氏を
傷心にたのみて有もせし
ともまどはして 既 鴈のつら
かれらが友をまどはしていかゞ我身の
あをまどはしてハいかゞあらん
おやのひたち 明 親の
常陸をもさそひて
既 右近の丞の
父のことなり。紀伊守か弟之明
孟 父に随てくだりしにもさそはれで内
侍所にしたがひ 細 源氏によくおもひ 師 源
氏のひきたてにしたがひてまいりし
に悪心の人之事にて見え
たり
こよひは十五夜 細 此かたをハ詩
首篇始の此極もわかれ
にてしりまいらする
けふにさいよことぞハ毛

つらにおくれぬほどぞなぐさむ。ともまど
はしては、いかに侍らましといふ。おやのひたち
になりてくだりしにもさそはれでまい
れるなりけり。したにはおもひくだくべかめれ
ど、ほこりかにもてなしてつれなきさまにし
ありく。月のいとはなやかにさし出
たるに。こよひハ十五夜なりけりとおぼし
出て、殿上の御あそびこひしく、所々なが
め給ふらんかしと思ひやり給ふにつけても。

此心をとぶらひ。花月の花やかならよつりそかくといひ出すふきさ無…紫式部石山
にて此物語を八月十五夜に書そめしを此段を挑として河海に志るされ給
月のかほのみ 抄 かゝりつけ
られし顔まもるやし
二千里のみ 明 三五夜中新
月色二千里外故人心と
楽天が作也。八林下中其の
時の兄弟に誦しつゝかゝる
殊勝のよし河海にみえたり
入道の宮のきりやへだつると
細 桐壺の巻にみえたりいかにせん
にきりやへだつるの哥の事也 細 人々の
夜ふけ侍りぬと申す也 さ
まなかなかと思ひめぐらして
源氏の月と見る給を八重
とふべきよりかへるなとあるも
へ心ありともみえぬなどさむるそ
まつるく 細
みちかりぞ 月をみる心
どぞとく。旅懐をなぐさ
むるかと源のことを月
にまかせて はあり
そのよ上のいと 細 挑巻

月のかほのみまもられ給ふ。二千里外故人
心とずじ給へる。例の涙もとゞめられず。
入道の宮の霧やへだつるとのたまはせし
程いはんかたなくこひしく、をりをりのこと
思ひ出給ふによゝとなかれ給ふ。夜ふけ侍りぬ
ときこゆれど猶入給はず
みるほどぞしばしなぐさむめぐりあはん
月の都ははるかなれども。そのよ上のいとな
つかしう昔物語などし給ひし御さまの。
院ににたてまつり給へりしも恋しく
思ひ出きこえて、恩賜の御衣ハ今こゝ

九字ともつかやつかの方よりて縁し河のるく孟さゝきの巻のすゑ帝の此すゑを
源の出の出ましく 卿これ九月のすゑ七日の月やかくてさし出そとあり 月より
て源のおもひ出をふすや
むかし物かたりなと 御集にもむかし いまの御物語ましくまふ源らも院にいとかう
みそてまつりなふてともあり源の流罪ハ菅君の讒言のゆへなれとさして帝にうら
みハなくてうつりしく却りひまつらせまふるや
恩賜の御衣 天子の御退りさまつりし御衣との心也 細 聖廟之御詠也 休 去年今夜
侍清涼 秋思詩篇独断腸 恩賜御衣今在此 捧持毎日拝余香 後集 おそハ聖廟宰
府にて去年九月九日の宴に秀逸の詩を作り給て勅禄に御衣を給はりしを思ひ出て下
至るまひておもひ出て作りまへる詩也源氏もそのことく御衣とり給ひしすゐるなんそれ
と御ひかしたまうて 細 源の御
御ぞたまはらんに
衣を帰事あるべし 此物語
の例ふく出おしくやうて
まるゝにかゝる数あまるさ
所ありし 明 ひつ縁りあとを
ろし朱まん 縁らるゝ
とハみしらう 明日
うとのこゝ― 此抄別して
細 被身ゝやうの身より
ても上へ根ハなきさへされ
と又時とうくハうしめさ
ことゝもありなりさそ左右
とハやり 明 たたとらしと
よありとぞしつくへすぬ御そたまさとに
身をそむずらさるへきとさまつり
源注 うしとのミひとへにに物ハありわれてひ
ぶりみきみをぬる袖ぬれそのころだ
鏡前よりの身を 貳八のありけるいめしうるかひろくなむを
孟五節ヶ文数廣さ之 細 ふとのありもありて
めぐらまそ所をもかけまハ此のこは弁
まそのかり備でてひはせうそかうしつ
逍遥 往者之
一 篇に出くるにはあらて御衣を身にそへくるかくしく思しさんもありとそ 明日
その比太宰 細 五節ヶ文之花发里巻に源氏おひ給ひてみさかり 文の但しくおきて
上源をもるゝ 師 職負令曰 太宰府帯筑前國 帥一人掌祠社戸口簿帳字養
百姓勧課農桑貢挙孝義田宅良賤訴訟郵駅傳馬烽候等之事 略記之
大貳一人掌同帥 下略 職原抄曰 寛亀十一年 勅大宰任限為五ケ年 凡當府ハ都
督九國二島 別帯筑前也 抄委
ろるよ須まのうらもあはれなる 須磨の浦をさしてなり
きばんとするよおねしてあるやまと
けバおひあらゆるかうわするさむそめさ ぬ名のそく
ちは弁のうちらさへそぐつうんけさう
きうらまして又そちのこをハつるそひさ 孟 源の節へ
もぐらも口おしうつらるよふうんの声風よ河
まそぐうらまこゆうりまそつうのさ夜 源の川まかなや
人の此ほどの物のまのかのんげそさるうわ
川めぐんおうさまりられかさにたり。
つりて引るゝる 弁此綱は引きかり五
節らぞらうくいなよ
うろそし
とこぶのさ夜
浄戸の物さびうるに感
夢ありし源のおやまそ

帥の御せうそこ　細 大弐か　これを帥と云よりハかり　帥ハ親王の任する官也　権の帥とあるそ実の帥也　親王をもて任さるゝ時ハ大弐をもて　権帥のなき時大弐　帥の事を執行也　大弐と帥といふハ帥の　職の時も大弐か帥の事　をとりおこなふ也とそ　筥本巻伊予助とあり　よ見るよみかへり　孟 帥か子か　明日　まいりのほりてハ先何　依物にとねかれハこの　かなこともあるよし　このとの蔵人　細 筑前　の守ハ源の御恩を深く　蒙りし人也　蔵人にも　源の君の御うしろみ　時のみかとの事なとを　かくれなき也

孟 大弐と帥と云也
そちはせうそこきこえたり。いとはるかなる
一位のまへにて申也
ほとよりまいりのほりては。まつ
いつしかさふらひて都の御物かたりもとこそ
思ふ給へ侍りつれ。思ひの外にかくておはしま
します御やとりをまかりすき侍るかたしけ
なうかなしうも侍るかな。あひしりて侍る
もの共
さるへきこれかれまうてきむかひてあ
また侍れは所せさを思ふ給へはゝかり侍る
ことゝも侍りてえさふらはぬことことさ
らにまいり侍らんなときこえたり。この
ちくせんのかみそまいれる。この殿の
くら人になしかへりみ給ひし人なれは
細 先より御使の帥ハ　まうけ　細 と六人たけさあれはまゐりて　諸大まうけ来迎　細 わきまへ　細 大弐か子也　孟 源の執奏

儀をハ君臣の義なれ道をしく　あるかる人、源ハ謫居の身なれは君恩賜の御衣を携て君恩を忘る事なし。又三位中将ハ朋友の信ありて須磨まて来て訪ひ給へと思へし。又宰相中将は朋友の信ありて　明 暁　わかしきものゝしるしと　源の御歎是よりおかしめを　とのん

細 柱をくせ　暁 今の世にてもいましむへし　さらすをまかくもすたる　いたり　明日

まくしと　細 ことなよ　そなたハさこゝろやう　たうとゆかしく御覧せ　られよ　帥 大弐ハもとさ　くしとやかなれは

しういみしと思ふとも見る人々のあれは
細 源御之帥 筑紫守 対ての事也
きこえを思ひてしはしもえたちとま
らす。都はなれて後むかししたしかりし
人々あひ見ることかたうのみなりにたるに
かくわさとたちよりものしたることゝ
細 大弐の方への御返事也
のたまふ。御かへりもさやうになん。かみ
筑前守也
源の御ありさまを語る也
なくなく帰りておはします御ありさまかたる。
細 源の人々を思ひやりて也
そちよりはしめむかへの人々まかまかしう
大弐の後也
なきみちたり。五節はとかくしてきこえた
はかりてあひてのこと
り
細 源の琴の音をいふ
琴の音にひきとめらるゝつなてなは
猶猶と心もとなしと也
たゆたふ心君しるらめやすきすきしさも

ふるさとや　細　天廻雲盤雲將霽唯是西行不右憲菅丞相詩　暁
ろくれゐー　月の行さ海へ。
月八西へ行て赤くそ赤右八東よとろ　仰と
とゑども我左辻の流されしこくよいあくび只西へ行のをと歌さうしやくやくみんく。
をあよ沢のこさも月のろろんるもろづ。天八右旋一日月八右
行もそて天八西へめぐり日月八西へゆくろろく白虎通よあり勘考とく

ふるさの　細　我が左辻をろうと　いづくさの雲海よりもまひろん月
我注　月八雲海を行ね
だねれしさ叫ぶれもま　ろんとゑろや月
どひろんとゑろや月　ハまよりぬねろれバ我そ
ろでいてろぶ海ろう　ろるまで月のろをいさく
いぞで優よろろべさや。　入方九月の行を忘ろな
さう海なりとろく海月　よ叫ろろ給ろやを
仰下の白雲海も月八　変ハまよりぬよ我左
辻の多れバ月をろづう　しとなろく
ともちどり唯　あり。
源氏も入我の人よとも

ふうりやとく　細　落白西白しまりろ
てハあろべうとく　仰　よをの衣うふ叫あろ
られぬまにさ海ぐ　ぬぐめつづく
そてくのこ　ろうさ海をめぐ
人くハあろうをろぬを
く
家よあろくろ海　細　さに
組立する人どりのろ也。次
ひあくの私乃やどりへ
のろ也。盃伺作の人この
私宅へろり
をろうとせぞ　細　むをめ
のをろうハなくて文のう
よしりやくにつろ
うけひうぎん　細　むそめ
のうとゑひうろそ承
引をどハうろでをい
ろうと

次

うこのゆゑうの人々（細 国々
みる由けのち いとそゑ
さぶりうをど入乃のひ
があるふいかよともふ
ざるなり（師 良清八前
の懸方ちのみ（ていも
お懸方ちの時うりう
のすをえうりうの
（しともおりで年月
をへうみとう御（く
うふ（良清ともちの
ゆりうれど（御ともやそ
年月をへてとぶりう
みう
このうううて 盃供の次
方なおつをととうて（入乃
の書よりう御（
わこの出をくせ（の吾子（ス
世（細 入通むもめのをの
うう 盃入乃のむもめ者
せうて供氏の出下向と送

みうのため
（のみめうしふ（そ師
祝しけうのやんこうき
けめともいをおりくあう
をへおりんとしもうさし
そ八人乃のかく
わやーさふりを
河史記高祖本紀（呂公曰
臣有（息女願（為季箕帚
妾（酒（罷（呂嫗（怒（呂公云
公（始（欲（奇（此女（與（貴人（
沛（令善（公（求（之（不與（何
自妄（許與（劉季（呂公云
此（非（兒（女子（所知也（卒（與
劉季（呂公（女乃（呂后也（生
孝惠（魯元（公主（
えうりうの（細 義の告うー初也（義
祖を聲よりう（児女の
うとところよわぐとを
よううう御（

ごとなさ（河 さけめぐをいをやりくからうよ
て（そのあ（河 こめ
（義朝月表のう
をまへわ
給なうう
と（ううと
て（えうり
まへ（つぐ
ふをやうをいよもうぐくなしくまねば
ゆきまで（係 貴人ふうものう
（義のう御
てもうてふ
のうてまへ
（もふけんそもうところとぐめまぐ

りつう寺も　細　和漢無双
なごめの左近のこんじゃ
侍同　阿野相公在納言
菅家西宮左府帥内大
臣以抜群賢才之聞
超配所之月二人不可
勝計
つくし地一のまつそで
暁吟之の尼公の涙へむも
めとまつ〳〵せんこと
袖せきもとめつる迄
おそでと尼公よまして
〳〵細同
ふるをかい　暁　相亜之衣
のうへのせうの大納言
入道のかちや。左府の事也。
女の幸ありはまでえわ
ず一例を引こ細代の
ためと桐壺のみやとよめる
孟
大臣一入道楷磨守一明石上
按察大納言一桐壺更衣

くもこそ
はいほのくもめぐれてもあるか　知入道の
なごりとうつくしく
つくし
やく。つくしよわることいかりろこそみもわづ
花散里をうつ
みぐしあ
人よこそ
なごりいつまよ加茂
入道の
相更衣のこと
らびるうろ行よ人のそねを
いをのう地
のこむ
とうて
ごこの
ふるのこと
ふるをかい　暁　相亜之衣
のうへのせうの大納言
入道のかちや。左府の事也。
女の幸ありはまでえわ
ず一例を引こ細代の
ためと桐壺のみやとよめる
孟
大臣一入道楷磨守一明石上
按察大納言一桐壺更衣

かごようけうせとばく
よろづ
孟順名工もろこしにも
ぐさおほく我朝の往昔の
人よりそ
ひろうろ
海のそこ
若紫の巻もけうあり

いしめでよ
きりのう
そ。細ふるの巻
のこと
もめぐ
うあてう
げよやむ
けう。細わかのうらのこと
りひろう
うぐ
ばうう
をうれう
みも入う

年よりこてふびはをきよまうて　年よりこてふびはをきよまうて
為業上よりやまうで　為業上よりやまうで

えーそのまの橘　えーそのまの橘
おほくあぐるをきこえて　おほくあぐるをきこえて
とありしまもなきつ　とありしまもなきつ

二月大日おはり　二月大日おはり
細玄輔の山ぢのことを　細玄輔の山ぢのことを
しおもつて　しおもつて

院の四月さ　桐壺帝を　院の四月さ　桐壺帝を
はせ帝られどもうちの　はせ帝られどもうちの
ことと朱雀院をつぶよ財　ことと朱雀院をつぶよ財
して今のうちれば波　して今のうちれば波
といふり　といふり
うつくれうくを　細　うつくれうくを　細
うれいふおぼえ　それの比　うれいふおぼえ　それの比
なくおぼえ　なくおぼえ

世中いとあわ　世中いとあわ
ほの波たなおぼえ　ほの波たなおぼえ
ぬきかりつるんぐ　ぬきかりつるんぐ
いふも他よことなり　胴　いふも他よことなり　胴
おもてみうに　おもてみうに
しのうちそしてあり　しのうちそしてあり
中ねの波たへまうんと　中ねの波たへまうんと
ひの立ものしお大弐の　ひの立ものしお大弐の
ちぐりしいえ　ちぐりしいえ
四うちうし　四うちうし
うしうは朋友の信あり　うしうは朋友の信あり
し考物よおうつうも　し考物よおうつうも
うれうまも　うれうまも
ももうもんいひうもの　ももうもんいひうもの
そてられぬおも風く　そてられぬおも風く
くり寒き五一りとく　くり寒き五一りとく
所ほうれのうぐく　所ほうれのうぐく

まうくのはりとのこ　まうくのはりとのこ
まる付のうく　まる付のうく
いうまう　細　可愛のうく　いうまう　細　可愛のうく
人はいうものれや橘ぐ　人はいうものれや橘ぐ
してなもうくつの心　してなもうくつの心
暁橘ぐいえ宴ぬり　暁橘ぐいえ宴ぬり
かり　かり

世中いとあわ
ほの波たなおぼえ
ぬきかりつるんぐ
いふも他よことなり
おもてみうに
しのうちそしてあり
中ねの波たへまうんと
ひの立ものしお大弐の
ちぐりしいえ
四うちうし
うしうは朋友の信あり
し考物よおうつうも
うれうまも
ももうもんいひうもの
そてられぬおも風く
くり寒き五一りとく
所ほうれのうぐく

まうくのはりとのこ
まる付のうく
いうまう　細　可愛のうく
人はいうものれや橘ぐ
してなもうくつの心
暁橘ぐいえ宴ぬり
かり

まうくのはりとのこ　まうくのはりとのこ
まる付のうく　まる付のうく
いうまう　細　可愛のうく　いうまう　細　可愛のうく
人はいうものれや橘ぐ　人はいうものれや橘ぐ
してなもうくつの心　してなもうくつの心
暁橘ぐいえ宴ぬり　暁橘ぐいえ宴ぬり
かり　かり

世中いとあわ　世中いとあわ
ほの波たなおぼえ　ほの波たなおぼえ
ぬきかりつるんぐ　ぬきかりつるんぐ
いふも他よことなり　胴　いふも他よことなり　胴
おもてみうに　おもてみうに
しのうちそしてあり　しのうちそしてあり
中ねの波たへまうんと　中ねの波たへまうんと
ひの立ものしお大弐の　ひの立ものしお大弐の
ちぐりしいえ　ちぐりしいえ
四うちうし　四うちうし
うしうは朋友の信あり　うしうは朋友の信あり
し考物よおうつうも　し考物よおうつうも
うれうまも　うれうまも
ももうもんいひうもの　ももうもんいひうもの
そてられぬおも風く　そてられぬおも風く
くり寒き五一りとく　くり寒き五一りとく
所ほうれのうぐく　所ほうれのうぐく

うきたり。今かく壑見え
なきすそうれ。さく 細 ゆらく
さけあめの垣
るさ海く。五架三下る新草
堂石階松柱竹編墻 天楽
師楽天为炉峯のもとに
山居せし時の詩の句をを
まく書くり
ゆうしき 細 源の衣裳也。
花色よ秀。ゆうし色のう
ちきおきひの梧黄と
いふべきにて先此色を
出て後よ衣裳の名と
ゆるり。ゆうしきハうも紅
とりく黄がらかりとハ
うきどれなるれさいる
るまいれり。三善清行禁深紅衣服奏議云
但浅紅軽黄未及火色
者不在制限云々黄がら
なりとハいふもと也。素純なる
さごまあとけのきれる
るく。うり衣をうらさき
といふ花のおりり同事く

爪のさ海あよりさきらんやうりなりよ行
あめの垣ましてし。石のきれのら
ら。どろそとるり物りくめづらるたり。（兼相なり石白さきへて）
やまり川めきて。ゆうし色のきざうりけ（花ちり源の衣裳のすをかへて）
よめをめびのりりごさぬさしぬさらち（みびのちさきうねさきく）
つれてごとさうにいかなりひりておしまる
しきいろどうろよ忘られてさうる
てこ。とりつひ給ゐでごとぞりそめ（販き）
みて。ちりし爪のとあとくうよミられら
ごもくらくのぞんでとどうさのくぞ（盤せ 調度 石馬のうぐ具）
為中わざるよ忘すて。行んどのぐどうひ
つよめ給ひうとえしさり物まいまゐ

ごもくらくのぞんでうどくぐさのぐ
書梁冀能挽満弾碁何よ委し
ちくぬぎすり 師一流りてござさうく
りのまつわり 細 洪洛まどゝをうそ
真ありとく
あきりしてひつりの
河東食 万葉 ひ川ハろうき
しろ物なり。或ハ海洋物
續國爾雅云海人のひつ
ものうとハおきりすき
いふ 細 海士のうづきさ
る猶く。又海物し 嘆 見る
どを数うろ物なれや
私 孟 貝 海草などく
心のゆく忘ハ春のしこく
世の中ハとてもかくても
みゆしるすてもわりやも
そきなりれど。雲の多
の然をこきひて。人の
やとうぬんのゆく忘ハ
深や中称も此海士の方
もみうりよりふく歓会
しまりし
はでくもうけ 雲にさま

孟 圍碁堯造之教朱丹 雙六孟嘗造之 弾碁 後漢
今日なまよ弾碁ハあし 簺 弾碁 今のせよハさ
うすり物りく芥りけうさ海よ忘すて中く
ことうく爪よつけ。なくありて忘ゆし
さら。わまどもあきりして。さいパ川物を
てまいまうとめしいそれくんぞ海よこ（海士を石とて海物を次鏡ぶる）
しつさ海なとどさせのよさ海ぐや
もげるさ方のられへをよもて。そこそり（細 海士のさづり）
とゐくさえづりも。心のゆく忘ハわれじ（仟海士の組さてるけづさき海く）
こゝるられとおそれれよきまふ。はぞと
そうげけさをす紙いけうりひのりと忘
つり。ね馬どもしちりりくそくしそやりまる（孟 兄うちくし）
おくらくり。なまよぞたなり。いねどゞそとり

つるこぞくもうひあうこ
皆海人よ漁火ぞうら 細舎や
なごなるこぞなごなるこぞ八妹
なるやこぞなるこぞ海面なし
いもうと出てかもくもも
うのかとうれう歌今とこ
あをうる 花催るふさうこ
ろう一枝 明神るたう
茶ふふうにりてみ
まくにものとうこ
さりくまぐくも物のかて
幸のさこありてこ
よりうこもうぐいう
みぐくこのくこ西風
のんぐ海てて下西こ又
返るくて海りのかも
ぐうりまふうぎ作
朋友のうこ 細雪天侍河
西のうこ
海よみこう恵皆浦八
楽天の元稹よあひうこ
今よりうくうり河酔
悲涙漂春盃裏吟若支

出てうみうこ 浮かべ
ちこうこうひて月ごうの出物給なこう
なごなるこぞなごなるこぞ 夕雪のこを中初の作りうこ
いもうと出てかもくもも
うのかとうれう歌今とこ
あをうる 花催るふさうこ
ろう一枝 明神るたう
茶ふふうにりてみ
まくにものとうこ
さりくまぐくも物のかて
幸のさこありてこ
よりうこもうぐいう
みぐくこのくこ西風
のんぐ海てて下西こ又
返るくて海りのかも
ぐうりまふうぎ作
朋友のうこ 細雪天侍河
西のうこ
海よみこう恵皆浦八
楽天の元稹よあひうこ
今よりうくうり河酔
悲涙漂春盃裏吟若支

暁燭前 花白樂天
江列八月廿日付二月廿
旧東漢 元微之よりうこ
もうこ
うこを 盃 うこれも久
うんのこ 師中初の初うよ
こをのこのれてよ海うよ
ぞうんてうこを海こ
めうこう 暁 三位の中初の
寄こ秋の原のやうに西
兵卅間の海これうこ
うぐうりうや 細うなり
と原こよりもて海う
の西八原とすう於師八
海をうこめのこと世と
こうて今於八海うこを原
の別るようぞうんていう
海をうくこうみうこ
やうよりうこし
くこうけうこけうこ
五こうこれ西の海うこの
風よありうてハ 何 胡馬嘶北風

だこれ酒をうず 紅葉の別く
ちうぞん 盃三位中初のうこ
為つれて見こ 細三位中初のこ
みうこ
こよりや海ぐうん 細三位中初のこ
めうこ西こてあう。あこの
なこれをうこ 元近の人の海これバまくこ
つう給。ゆこ 黒 弱
あこうてハぐえめべこれバるぐ

越鳥巣南枝 ふるごと胡國の歟せ仍ほ風よあれハ旧里をそこひてゐどころかり 細胡馬
歟北風ニ依ル 故郷と思んあり 愚按この詩文選よあるみて越鳥依南枝ニとあり
ゆゑにものび 形をえ 盂仏舘ハ三位中将のまつ
せられまつりしハ仏舘中
将の住なれるゆゑ
き館の名ありなど
ぐりとあれバ添ふ
るとも館とをてり給
ふ氏師添ふるとも館
をぐうり中将へまつ
られ
ううえしまつるび 老いま
ま中将の別のほともも
あるとも身をそそも品を
ど添ふも舘をぐへう
ぐびよんのとぐむぎさ
やうよしまつるとく
雲ちく 細露よこ位中将
とをいてそろ雲ゐよをく
ふるひ添ぐうえし我ハ
をう罪となるさ多ろう
なり師 雲ちく八幡宮
のくぐらいなのく

これいものれん 細我ハ罪なき身とろぐ神ぐうそ神ぐ
とのぐくなろんいまれまるとも聖廟なぐとも
いえ神ぐうえんとうとも

晩 菅家よ相南わりふ只今ろ 細日
ぐ。うぐぬめる人いむりのうえうえんぐよ
盂仏舘 ろぐくしうう世よ文まぐらみえうえ
それいぐなふうえ神ぐうえ雲ゐよひうりねをそるくり
んえひ神ぐうえ
ぐるうえ
しを神をそれうえ
うえ神ぐうえ
ううえかりふ
ひのつひうちよいぐでうえ

越鳥巣南枝 細我ハ罪なき身とろぐ神ぐうそ神ぐ
とのぐくなろんいまれまるとも聖廟なぐとも
いえ神ぐうえんとうとも

晩 菅家よ相南わりふ只今ろ 細日
ぐ。うぐぬめる人いむりのうえうえんぐよ
盂仏舘 ろぐくしうう世よ文まぐらみえうえ
それいぐなふうえ神ぐうえ雲ゐよひうりねをそるくり
んえひ神ぐうえ
ぐるうえ
しを神をそれうえ
うえ神ぐうえ
ううえかりふ
ひのつひうちよいぐでうえ

不祥ノ礼也 細つゝしむ 清くよろし
軟障(ぜじやう) よのやうなる物之 彼名は
はぜんじやうとよぶなるなり
ぜじやうと可被 明河
云 軟障 有畫圖ニ者也 謂フ
ある私 軟障 堂上ニハ云フ軟障ト
堂下ニハ云フ引幔ト 又堂下ニモ有
宴之内宴 御楽之時ト云
哭 一注 幕のやうなる物に
あるきぬ也 絵にかきて壁
に懸て引也
陰陽師 其國にかくひろく陰陽師
河辺法師 居住播磨ノ国ニ
ちかごろの事 細 肯八来く
に陰陽師 醫師とある
さかり 汀海に 在海法
師の事と引て ぞまきに
不吉 孟入右府 宣
とんでやうしとなむべしと
思ふの事
ちいさし 細 ひとつにし
あつかひて 今も有く
法師の流れなり ハ人形の如し

ひそかなるくはだてとて、ある人、はみそぎ
しのべて、かい漁しき人のせとゆれば
海づらをゆくして出のとりのとりそら
まぜんざやうしたうりを引めぐらして、こ
のかうしにひろき陰陽師めてたら
へをさせ給、舟にしたくさんへのあそ
ぬるをさき給ふぞも見てれて
ちつぎうしけり海のつゝまずがれそ
ひとるみやいまのはらすさきとてなまつる
さ海さぶられにゆくぞいとおすそしあ
あふこのとしそいつかくとちぎれつて、
ものもたてぬにつうさゆくされなかり

是明人形をもつて孟源のかりひとつさかへ人形にかへ人のうへをあらぬすまさ
おなじく 細 晴にあるいはくれもなく源の法形にうかへ
それにぞ
やほよろづ 細 枝をし給
その方よりけり 嘆 八百万と
神書に見えたる詞也
仰 八百万神世にあり
ゆゑ神をいふて
との給ふに 嘆細 の給ふて
ちかくやうそ風雨の変を
あはれとおもふは源の只
今罷りさまし と詠ず
かくは有るに天も感して
天変あらざるの事なり
て給ふに陶条の瑞ときれ
なげんかなしむし 孟は寄
あそびまつれの儀に吹出
すと
ひらぎき 何 くさもとり
あつまりて祈ることぞ
くし仰 御にあらぬ

ほゝけれく
やほよろづ神も哀とおもふらん
つまあそれとみゆれどもの ふくはやる
風ふき出て、雨もふる、常ねばらしへを
あさてぞさしよまり、ひらけきる
とうふりまでいてあつらしたれぞれ
あり給ひんとするに、籠もとりあへぞ、
さらうろもなきにまち、川吹ちら
しておる風なり、波いていとめうらた
ちさせ人いのめしと見る、海のほとりて

よ三年留まりぬ。日本紀よみくだりて、又日本武尊の東夷を伐ちたまひしより上総の国よ渡りまして、走水神をとりまもりとしてまして、海よ入りひて走水よりうて海よ入りひて走水よりこのとまりぬよへぐ〳〵 細明石へのうひ書あとづき發端なりへし